

NTT Data通信

# 戦後民主主義を、 こうやって立て直そう。

橋爪大三郎

インタビュアー・橋爪大三郎 戦後五〇年、日本社会の構造疲労がいよいよ目立ってきた。とりわけ、日本政府の統治能力（危機管理能力）の低さは、目もあてられない。阪神・淡路大震災の対応のまずさに、諸外国もあきれているわけだが、実はその根底に横たわる、「政府を批判すればなんとなく安心だ」という、国民の側の根深い国家への不信感こそ問題であると、橋爪氏は指摘する。近代国家や政府とは、本来、法のないところになんとか秩序を生み出すという国民一人ひとりの下からの意志でもって築きあげられる。国民一人ひとりが自由な

東京工業大学工学部教授（社会学）。一九四八年生まれ。東京大学文学部社会学科卒。同大学院社会学研究科博士課程修了。構造主義を踏まえた言語派社会学の樹立をめざし、言語論、政治論、制度論、身体論、権力論、空間論、性愛論、思想論など思考の「越境者」として現代思想を追究。特に、戦後民主主義の凡庸さと長所を抽出し、戦後の軌跡を冷静に対象化しうる思想家として注目されている。「一人ひとりの自由を追求する原理原則と大勢の自由を追求する原理原則」とがひとつになって生きられるのが思想。「民主主義という思想を生かされるものとして生きてこなかった」という問題意識のもと「今我々の社会の問題は日本の市民社会が民主主義についてどういう思想をもつ

主体である一方、近代国家は絶対の国家主権をもつ—この矛盾にみちた緊張関係こそ、制度としての民主主義の出発点なのだ。日本の社会のように、個々人の生活の延長上に国家があるという感覚が欠如していると、権力を上からの押しつけとして忌避・嫌悪する一方で、個人の私的な世界はまったくのエゴの領域となってしまう。こういう分裂した状態では、個人と社会、自由と公共性の対立と調和、といった民主主義の根本問題をまともに考えられるはずがない。思想を回避し、原理原則を回避し続けてきた戦後日本社会が、民主主義を大地に根付かせることに失敗したのは当然だろう。震災が我々に突きつけたのは、日本社会が果たして新しく再出発できるかという問いであり、日本人は民主主義を生かせることができるかという問いである。「一人ひとりの人間を活かし、多くの人間を共に生かしてこそ思想である」と語る氏に、新しい日本社会を再構築するための道筋をインタビュアーした。

民主主義の根底に横たわる、矛盾をはらんだ緊張関係。それに気付かない戦後民主主義とは何なのか。

戦後五〇年、日本の社会構造のほころびがあちこちに目立つようになりました。阪神・淡路大震災のときの政府の対応に、国民は失望し、国家への不信感がつのりました。戦後民主主義はやっぱりだめだ、いや、民主主義そのものももう無力だ、という声が拡がっています。

しかし、何かあると、政府が悪い、国家が悪いと国民が騒ぐことこそ、戦後民主主義の悪い癖であり、本来の民主主義とは似て非なるものなのです。このこと自体、日本に民主主義

のかが問いとなって誕生」していることにあると主張。難しい問題を簡明に語ることを心がけ、事実わかりやすく語る気鋭の思想家である。著書に「現代思想はいま何を考えればよいのか」「民主主義は最高の政治制度である」「橋爪大三郎コレクション」I「身体論」II「性空間論」III「制度論」など。

が根付いていないことを示しています。日本の新しい社会構造を模索しなければならぬ。今こそ、まず民主主義の根本に立ち帰るべきです。さもないと、自分で自分の社会を再構築することなど、決してできないでしょう。民主主義を問う、この問題を大きく掲げることが、ポスト戦後五〇年の日本社会の課題となるのです。

\*

そもそも民主主義は、それ自身が、パラドクシカルな概念です。そして、実際にそれを運用しようとする、とてもむずかしいものなのです。

具体的に言います。人権と国家主権。この二つを両立させるのが、まず極めつきの難問なのです。

人権とは、一人の人間が、他の人間や、国家や、宗教や文明や、自分以外のあらゆるものから完全に独立して、どんな他人にも指示されることなく、自分のことはすべて自分で決めていいという原則です。自分だけが自分の主人。個人が絶対的主体になっている。

ところがこうした個人は大勢いて、一緒に住んでいるわけですから、そこには秩序がなければならぬ。その秩序の最高の形態を国家と呼びます。そして国家は、絶対の権限、立法権や司法権、行政権、外交権、軍事権などを持つと決めた。この考え方は古代にも、中世にも近世にもなかったのですが、近代になってはじめて、国家は（人間のつくったものでありながら神のごとくに）全能なものとしてイメージされた。これが近代の国民国家です。そして、国家主権は絶対である。

個人の絶対化と、国家の絶対化。この二つがなければ近代民主主義は成り立ちません。しかし個人も国家も絶対の主体であれば、果たして両立できるのかという矛盾が生じます。例えば国家だけが絶対的で、個人がその奴隷であれば、矛盾はなくなるけれども、それは民主主義ではない。逆に個人が完全に自由であって、国家という枠組みがないなら、ここにも論理的な矛盾はないけれども、ホッブスが自然状態と述べたようなエゴとエゴとのぶつかり合いが生じます。結局誰も、自分の権利を守れません。

民主主義は、そのどちらでもなく、個人も絶対の主体であり、国家も絶対の主体であるという、まことに矛盾した前提から出発する制度なのです。こんなことがそもそもありうるのか？ありうると考えるのが、民主主義です。

民主主義国家はいつも、このパラドックスと向きあっています。例えば、アメリカでは、連邦政府の権限と自分の権利が矛盾するかも知れないことは常に意識されていて、何か問題があると大騒ぎが起こります。これを日本人から見ると、アメリカは非常に問題の多い社会に見えますが、そうではない。むしろ日本に問題がないように見えたことのほうが問題で、民主主義がきちんと運用されていなかったということなのだ。日本の市民社会は、民主主義に根本的なパラドックスがあることすら、認識していないレヴェルなのです。

民主主義とは制度論。制度はフィクションだから機能する。

では、民主主義という思想はどうして現われてきたのか？

1 — ホッブス

Thomas Hobbes

(一五八八—一六七九)

イギリス革命期の哲学者。政治思想家。人間は、己の欲するがままに自己保存を追求するものであり、この生存への自然的欲求は、いっさいの社会的制約に先行する（自然権）として承認されるといふ人間論の立場をとった。さらに個人は、生存の手段をめぐり他人と紛争を起すのが自然の摂理であり、それを調整するための理性的判断を（自然法）と呼んだ。自然法に基いて各個人は相互に契約を結び、社会的に統一された意志（主権）を形成することにより、個人対個人の紛争という自然状態は終わり、国家状態が始まるという、史上初の国家契約説を打ち立てた。

\* 黒崎政男氏インタビュー参照

私はこれは、キリスト教の読み換えだと思えます。

キリスト教の構造を考えてみると、人間一人ひとり、他の人間に服従しない、靈魂の自由、信仰の自由を持った絶対的存在者です。同時に神も、何ものにも束縛されず、宇宙からさえ自立している。この絶対神のもとに、人間が自分の主体性を持ったまま従うという大きな矛盾があるのですが、それは信仰という名で覆い隠されてきた。アウグスティヌスという人は「不合理ゆえに吾信ず」と言いました。ギリシアの論理学で考えると、キリスト教の三位一体論などイロジカルで説明がつかないわけですが、だから信じないのではなく、イロジカルだからこそ信じて宣言したわけです。この結果、矛盾を追究する道は断たれました。その精神はずっと受け継がれてきた。

宗教改革を経験して人々は、神の話をしないうで社会を組織しようということになり、神に代わるものとして国家権力が作られたのです。神が国家主権に置き代わっただけで、このパラダイムで考えていく限り、国家主権の絶対性、そして人間一人ひとりの絶対性の両方を前提にして考えざるをえない。民主主義とはつまるところ、このパラドックスをどうやって運用の中で解消していこうかという方法論、制度論なのです。

\*

ここでひとつ大事な点は、個人が絶対であると言い、国家が絶対であると言っても、それはあくまでモデルであり、フィクションだということです。国家はまだしも人間が設計するものだから、絶対主権を持つもののように作れますが、人間なんてそんなに何でもかんで

も自分で決められるほど主体的ですか？他人に頼るしかない子供や老人、病人だっている。フェミニズムが抗議しているように、女性だって自分のことを自分で決めてはこなかった。男性にしても、企業の函車だったり受験戦士だったり。人間は自分のことをすべて決めていくというより、お互いに影響しあっているというほうが正確です。

だから、個々人が主体であると言っても、それは分かりやすい符牒でしかなく、人間の実態は必ずそこからずれているわけです。それを全部考えないと、人間の全体はとらえられない。でも、そこを考えていたら制度はできないから、バッサリ削って、人間はみな同じ主体であると考え。では、無視された部分はどうするかと言うと、それは民主主義のような制度論や法律論では扱わず、文学とか芸術とかに任せる。そうした領域が、人間の実際と制度の建前との間のギャップを埋めていくのです。そういうふうに分業するのは、人間の精神のあり方として健全ではないでしょうか。

日本の伝統思想には、民主主義の土台が見あたらない。

パラドックスを引き受けながら、民主主義をうまく運営するにはどうすればいいか？

まず人間一人ひとりが実在していて、しかもみな自分の主人である。それを絶対に確実なことだと信じていることが、出発点です。それに比べれば国家は、絶対かもしれないけれど、所詮は制度、作り物です。ですから、国家と人間が矛盾するとなったら、やはり人間を取らなければなりません。これは常識というものです。しかし民主主義には、人間よりも国家をとる

2—アウグスティヌス  
Aurelius Augustinus  
(三五四—四三〇)  
初期キリスト教会の教父。思想家。「告白」「三位一体論」「神の国」などの著書がある。

3—イロジカル  
Illogical  
非論理的な。不合理な。

ことも可能なわけで、そうなればファシズム、全体主義、もしくは共産主義になります。

日本はどっちなのか？ これは大問題で、歴史学者は戦前日本の天皇制を、ファシズム・全体主義と分析しようとしたが、しかしどうもそうでもないのです。それから戦後は、一応見かけは民主主義になったけれど、仔細に見てみるとやっぱり民主主義国家とは言いにくい。確かに戦前と戦後では、日本社会は変化しました。しかしそれは、ファシズムから民主主義になったというのとは、ちよつと違うと思うのです。その変化の実態はまことに曖昧で、これを説明することに日本人の思想的課題があるわけです。アメリカのような民主主義国家と同時代を生きる我々としては、自分たちの社会がどういう社会で、どういう変化を遂げてきたのかを、自分たち自身でも理解できるようになきちんとしたストーリーとして主体的に作りあげ、国民に向かって広く訴えかける必要がある。

日本は歴史上、一神教の考え方、キリスト教の考え方を一度として受け入れたことがありません。そのかわり、あまりはつきりしたものではないのですが、日本独特の世界観、宇宙観を持っていました。そのベースは仏教であり、神道、儒教です。この三つはまったく別々のものですが、日本人はそれらをだいたい同じものだと考え、それぞれ都合のいい部分を都合のいいように解釈しながら、自分たちの社会を運営してきました。明治以降、神道の元締めとなる天皇も、江戸時代は仏教徒で、仏壇を持っていたのです。

こういう曖昧な日本人が政治秩序を形成しようとしても、当然、民主主義になるわけがない。民主主義は絶対的な神（あるいは国家）と絶対的な個人、という考えがないと運営でき

ませんが、日本の伝統思想のどこを探してもそんな意識はまるでないのです。儒教の考え方は、聖人が一番偉く、次が皇帝、官僚・・・・と下ってきて、学問のない一般庶民は小人という具合に、人間には違い（差別）があると考えられている。民主主義の、人間はみな平等、という考え方は対極的です。仏教や神道の考え方は、現実社会に無関心ですから、哲学めいたものはあっても、国家論がない。ということから、日本人は民主主義とは異なる自分たちの政治システムをこしらえなければならなかったのです。

日本人の国家権力嫌いは、律令政治の昔から。

日本人が作った政治システムには、大きく分けて二つあります。

最初は律令政治、当時のワールド・エンパイアだった中国を、何から何まで真似たものです。これは最初よかったです。百年、二百年と進むうち、だんだん日本人と何となく肌が合わないとわかってきます。官僚制も、都市づくりも軍隊組織も倣いました。しかし、官僚制は機能せず、すぐさま世襲化し、軍隊も正規軍として募集するよりも豪族の身内で集まった方が戦闘力が発揮できる。そうしてとうとう、中国をモデルにすることをやめてしまつた。

次に主役に躍り出たのが武士です。武士のいちばんの問題点は、彼らがもともと泥棒だということ。もともと貴族の所有地を警備していたはずが、いつのまにか泥棒になり、気がついてみたら、貴族の所有地を全部取り上げていた。これが武家政権です。こうした政権

4— 律令政治  
中国の隋唐の国制である律令制度を祖型とし、七世紀半ばの大化の改新から十世紀半ばの延喜・天曆の頃まで行われた日本の政治制度。〈一君万民〉の理念により、天皇を最高権威とした中央集権的な性格の官僚機構により、成文法典に基づいて私有地・私有民の廃止、中央集権行政機構の整備、班田収授法の採用、税制の統一などが行われた。

が、江戸時代まで続いてきたわけですが、その実、武士たちは自分たちの支配の正当性についてずっと疑いを抱いていた。天皇の子孫であるとかいう伝説をふりまいたりしましたが、要するに他人の土地を横取りした連中なのです。

こういう状態では、支配者（つまり国家）と民衆との関係が、民主主義とはまったく違った様相を帯びてくる。国家は民衆にとって、税金をかっさらっていく存在であり、法律を押し付けてくる存在だった。国家は、民衆の下からの意志でこしらえたものではないので、国家を民衆が支持する、正当化するという論理がないのです。民衆にしてみれば、国家は邪魔であり敵です。しかしその一方で、民衆のエゴというものがあり、税金を取られるのは嫌だけれど、道路や堤防は作ってもらいたいというふうには、税金を使わずには成り立たない社会公共性の利益だけは享受したい。この、民衆のエゴと国家との間を調整する思想が日本には育たなかったから、国家は民衆のエゴを憎み、民衆は国家の権力を憎むという不毛な関係ができてしまった。この意識が、現在の日本社会までずっと引き継がれ、国家権力への忌避や嫌悪を生んでいるのです。

市民社会では、一人ひとりが完全な主体であるべきで、その主体を実現するためにこそ国家がある、こういう意識が欠如してきたために、日本は、民主主義国家への土台が持てなかった。しかし現代の日本は、欧米諸国と同じく地球社会のリーダーとして、先進国にふさわしく日本社会を運営するにはどうしたらいいのかを真剣に考えなければなりません。それにはまず、日本の伝統思想とはどういうものか、現在の我々のものの考え方にどういう影響を

与えているか、をつき詰めなくてはならない。そしてそこから、要らないものは捨て去り、守るべきものは守り、それが民主主義と両立するものを問う。つまり我々日本人は、民主主義に対してどういう思想を持てるのかを問う作業をしない限り、何も始まらないのです。

思想とは、人々の営みを支える堅固な枠組みのことです。人間を守り、人間をよりよく活かすための、思考の産物にはかならない。政治思想としての民主主義も、人間を活かしてこそ民主主義なのだ、私は思います。

思想にこだわる人間のタイプには、二つあるようです。ひとつは、私もそうですが、思想を自分が生きていくために、そして多くの人々が共に生きていくために、考えていこうというスタンスの人。もうひとつは、思想自身に魅いられてしまうタイプの人です。後者のタイプの人にとっては、生活と思想は必ずしも関係なくいい。思想が立派でさえあれば、それでいいのです。だから、なるべく多くの思想を学び、立派な思想の宮殿の住人になりたいと思う。そんな人がいてもいいとは思いますが、それが思想のあるべき姿であると、私は思いません。どんなに不恰好であろうと、自分でこしらえた思想の方が、借り物の思想よりもずっと値打ちがあるし、いざというとき役に立つのです。

\*

思想にはいくつか特徴がありますが、第一は、言葉でできていること。ただし必ずしも日常用語であるわけではなくて、特殊な概念をたくさん使っている場合もあります。第二に、その言葉が組織的に組み立てられていること。第三に、多かれ少なかれ、現実とのギャップ



があることです。現実をそっくりそのまま描写しただけでは、それは認識ではあっても、思想ではない。現実には何の作用も及ぼしません。現実にあるはずのないこと、これから現実となるかもしれないこと、現実となつて欲しいことが、思想には込められている。

思想とは、現実と距離を保つための方法です。もしも思想がなければ、現実に密着し現実に埋没して生きていくしかない。せいぜい現実に対して、自分の個人的希望を抱くことができるに過ぎないのです。しかし、そこにもうちよつと理由をつけ加えて、こういうふうになれば今よりもっといい状態になるのではないかと、道筋を追つて述べ、自分もそう信じる。それを、言葉を手段として駆使して、多くの人々と共有できるかたちで述べ、そこから実現可能なもうひとつの現実をつくり出す。これが思想の役割です。

こう考えると、個人の趣味に合わせた壮麗で手の込んだ思想の宮殿をこしらえてしまうと、ある人はそこで快適に過ごせるかもしれませんが、別な人々にとつてはあまり快適でなくなつてしまう。多くの人々が一緒に生きていくためには、シンプル・イズ・ベスト。思想は、単純な方がいいのです。これを私は「思想のミニマリズム」と呼んでいます。

ミニマリズムでないと、思想は生きられない。

思想のミニマリズムとは、多くの人々の共通項をなるべく純粋なかたちで取り出す、ということ。例えば、私個人としては五つの希望がある。しかし隣の人の希望は四つしかなく、五つめは私だけの希望で、みんなが望んでいるわけではないことがわかった。そしたら、私

の個人的希望はそれとして、思想を組み立てるときには四つにしばつておいたほうが、仲間が増える。つまり思想としてのパワーが出てきます。

そういうふうにして、多くの人々の共通項をしばり込んでいくと、でき上がった思想はどんどんみすぼらしくなっていくかもしれない。壮麗な思想の宮殿が好きな人から見れば、趣味じゃないかもしれない。思想がだめになつていくようにも見える。でも私に言わせれば、そうではないのです。現実を変える力が強まるのなら、そうすべきなのです。もちろんやり過ぎて、現実に密着してしまつては意味がないわけですから、根本のところは譲れない。どこが思想の根本で、最低限実現しなければいけないポイントなのか。その優先順位を、自分の個人的希望の中から見つけ出し、枝葉の部分を思い切って切り捨て、時代の要請に合致し、多くの人々を巻き込める部分に集中していく。この能力を持ったとき、思想家はミニマリストになれるのです。

\*

今日本に必要なのは、思想のミニマリストです。

むかしに比べれば日本人もエゴを表現するのがうまくなり、みんな勝手なことを考えるようになりました。こんなとき、小さなカルト・グループやオタク集団をつくるのは簡単でも、大きな集団をつくるのは非常に難しい。思想家がいつまでも自分の好みにこだわっていたのでは、思想は何の力も持てないのですよ。そんなことより、今我々に必要なのは、日本の現実を少しでもよい方向に動かしていくための、方法論としての思想です。それには、ミニマ

5— 思想のミニマリズム  
橋爪氏が提唱する、現代思想のあり方。個人は、どんな思想を持つと自由であり、どの思想に対しても同じように権利を認める。そのうえで、教ある思想の中から、私も多くの他人も共に生きていけるために、多くの人々が共有できる必要最低限の思想を選択すること。氏は、思想はミニマリズムであればあるほど、現実を動かす力を持つると主張する。

リズムでいくしかない。

日本人はしかし、これまでそういうかたちの思想をつくったことはありません。思想家・知識人は民衆から孤立し、自分の思想に閉じこもる傾向がありました。例えば、長い間思想界で影響を持ったマルクス主義は、日本に入ってきた最初からかなりの完成品で、その詳細な設計図に合わせて社会をつくり変えていこうというものでした。時代の要請に合わせて、ある部分だけを取り出すことはできない、あくまでも思想としてワンセットなのです。そうすると当然、思想から現実性が少なくなっていく。それでも思想の壮麗な宮殿に閉じこもり、現実が間違っていると言いつけるなら、過激派とならざるをえない。過激派は、方法こそ過激ですが、実は極めて保守的なんです。思想が現実となる可能性がほとんどなくても、自分たち少数者が、その思想に忠実に現実に向かっている。そのスタンスを証明することだけが重要なんです。となれば、ほとんど個人的事情です。だから政治ではなくて信仰、宗教になっています。

今の日本に必要なのは、そういう思想のあり方乗り越え、根絶やしにし、ミニマリズムによって思想の社会に対する効力を復権すること。これ以外にないと思います。

対立に満ちた国際社会で、民主主義を機能させるために、

日本は何ができるか。

世界情勢に目を転じると、いまやポータレスの時代で、国民国家の「国家」という枠組みそ

のものが変化してきています。そうすると、民主主義という思想は、これからどうなっていくのか？

国際社会の主体は、国家主権ですから、そこには完全な民主主義はありません。

それには二つ理由があります。ひとつには、国家には人間と違って、大小がある。もうひとつには、国家間の矛盾を調停する上位の絶対的な主体がありません。国際社会には、議会も立法機関も（本当の意味で機能する）裁判所もないのです。つまり制度がない。

それでは、制度がないところに民主主義はまったく成り立たないのか？

私はそうじゃないと思います。民主主義の考え方は、成り立ちます。国家は制度としてこしらえたものだったということを出しましょう。そうすると、まず大事なことは、それぞれの国家の下に生きている一人ひとりの人間こそが、国際社会の最終的な実体なのだということに根本に据えることである。こうした、世界中の人々の人権を、平等に考えていくということが、国際社会における民主主義のまず第一の出発点になります。

これまでの国家の上に立つ、地球単位の絶対的な主権（つまり、世界政府）ということになると、おそらくあと二百年かそこらは成立しないでしょう。当分、国家という枠組みでいくしかないです。国家はいくつもあって、利害が対立し、互いにいがみあうものです。しかし、いがみあいながらも、当分欠けている人類の統一政府、これがもし成立していたらどういう政策を実行するだろうかと考えて、それを少しでも実現していく。これが、世界規模での民主主義を実行する場合の、発想の根本になります。

今この地球に生きる人々の人権を、もつとも踏みにじる可能性が高いのは、貧困です。

現在、地球上には飢餓人口が七億九千万人いると言われている、その人々は生命の危険に脅かされ、就学の機会を奪われ、就職の機会も奪われたままです。でも、国家という枠があるために、自由に外国に移動することもできない。個々の国家に暮らす人々は民主主義を享受しているとしても、もつと上の観点から見れば、人権が大幅に制限されている状態です。

これにどう対処するか。各国の経済状態が均等であるほど、国家統合の可能性が現実味を帯びてくるわけですね。現在のような貧富の格差がある状態では、社会保障にともなう所得移転（税金）などを考えると、国家統合をすれば先進国にとつて圧倒的に不利ですから、まったく現実性がない。発展途上国の方にも、それだけの能力がないから、当分の間現状でやっていかざるをえないのですが、しかし、方向ははっきりしているわけです。そのためにプラスになる行動を、国際社会が、少なくとも日本の国家が明確に打ち出していくならば、それが国際社会で民主主義を実現する最大限の方法であると思う。

下からの意志で日本を再組織しよう。

これからの日本は、本当の民主主義国家としての存在を、世界に示していかなくてはならないでしょう。

その際、第三世界に対する関わりあいとして「かわいそうだから何とかしよう」みたいな考え方があります。そう思わないよりましかもしれませんが、それだけだといき詰まると思

います。だってそれだと、相手がかわいそうでなくて、憎々しげだったら、助けなくてもよくなつて、逆にいじめてやろうということになるではありませんか。「かわいそう」みたいな不安定な感情に、国際関係を任せるべきではない。

\*

本来の民主主義の下では、各自がルールにのっとりフェアに振るまい、国家のために場合によっては、自分のエゴを犠牲にするという行動がとれるわけですが、なぜそれができるかという点、人間の尊厳を守るため、この世界に統一した意味をもたらすためなのです。自分ひとりの満足のためでも、エゴのためでもない。もつとレヴェルの高い行動が自発的にできるようになるというのが、民主主義の精神なのです。

今の日本に、そういうことを考えている人がいないわけではないのですが、まずそういうことを真つ先に考えるのが、官僚です。そして、官僚の取り巻きである学者や知識人がそういうことを言いたて、政治家がそれにならない、ジャーナリズムが書きたてる。国民はいちばん後からくつついて行くが、半信半疑だ。これが日本社会の順番なのですが、民主主義の精神とまったく逆です。

本当は、まず真つ先に国民が考え、国民の期待に応えるためにジャーナリストや学者が情報を提供し、政治家は政策を考えて国民に選択肢を与え、そうしてまとまった国民の総意を実行するために官僚が働く、という順番でなければならない。

日本の場合、国家と国民の関係が円滑に動いていません。その意味で、後進国だと言って



いい。さつきみたいな官僚を養成するのが東大の法学部であり、親はできることならうちの子も東大の法学部に合格してくれるといい、みたいに思っていたりする。こういう風潮に流され、それを日々再生産するばかりで、社会に対するアイデアを日常生活のレヴェルで、親も子も共有していないのです。これはやはり、ひと口で言えばエゴです。エゴは否定できるものではありませんが、しかし、権力とエゴの関係が整合性を持たなければ、そのエゴは自分のフォルムを持つことができない。文明のレヴェルに達せず、非常にナイーヴな、もろいものにとどまってしまう。

\*

民主主義の精神を身につけるためには、考えなければならぬ。

考えるというのは、もともと関連のないところに関連をつけていくことです。

日本人は、知識ならいっぱい持っています、それぞれ関連がなくていいと思ってきた。科学と政治とは、関係ない。経済と宗教も、関係ない。江戸時代と近代日本も、関係ない。私とあなたも、関係ない。関係ないと言ってしまう、そこから先は、ごく限られたことしか考えられなくなってしまうのですよ。例えば、政治の舞台裏はどうなっているのかとか、どうやったら値上がり確実な株が買えるのかとか、今年のペナントレースの行方はどうだとか。特定の領域で起きていることについては、専門家がいて、私たちの代わりにさんざん考えるべきことは考えているわけです。普通の人は、その人たちが考えた結果を、情報として手に入れれば、それ以上考える必要がない。情報社会というのは、そういう便利な社会で、情報

が得られるなら、何も自分で考えなくていいわけです。

じゃあ私たちは何を考えればいいのか。関連のない事柄の間に、関連を見つけることです。それができなければ、自分の人生の意味すらつかめないのではないか。それができてこそ、何が大事で、何が枝葉かを考え、物事の優先順位を決めることができるのです。

我々一人ひとりが、そうやってものを考える。それが、一人ひとりの市民の下からの意志によって、これからの新しい日本社会を再組織していくことにつながると思うのです。